

## 第6節 出来事を「あらわにする」「こと」の意義

廣松渉は『もの・こと・ことば』の序章において、大野晋の「コト」・「モノ」の言葉の推移と区別についての記述を援用し、助詞としての「もの」や、モノ悲し、モノの三年、若いんですモノ、と言った用法と語義や語法には立ち入らずに議論を進めているが、『岩波古語辞典』（補訂版）から引用している定義は次のとおりである。

古代社会では口に出したコト「言」は、そのままコト（事実・事柄）を意味したし、またコト（出来事・行為）はそのままコト（言）として表現されたと信じられていた。それで、言と事とは未分化で、両方ともコトという一つの単語で把握された。したがって奈良・平安時代のコトの中にも、言の意か事の意かよく区別できないものがある。しかし、言と事が観念のなかで次第に分離される奈良時代以後に至ると、コト（言）はコトバ・コトノハといわれることが多くなり、コト（事）と別になった。コト（事）は、人と人、モノとモノとの関わり合いによって、時間的に展開・進行する出来事、事件、などをいう。

つづいて『岩波古語辞典』では、「時間的に不変の存在をモノという。後世コトとモノとは、形式的につかわれるようになって混同する場合も生じて来た。」という結語的記述があるのであるが、なぜか廣松はここでは引用していない。

ついで、「モノ」との区別に関する説明については、大野は、コトが時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるのに対して、モノは推移変動の観念を含まない。むしろ、変動のない対象の意から転じて、既定の事実、避けがたいきだめ、不変の慣習・法則の意を表すとまとめている。

本論ではさしずめこの簡略明瞭な大野の辞書的定義にしたがって議論を進めたい。そのまえに大野へのコトとモノの解釈に対して視点が異なる哲学的領域から痛烈な批判をおこなっている『日本語の哲学へ』（213～215頁）における長谷川の批判をまとめて紹介しておきたい。わたくしの「おふでさき」における「こと」「もの」論は、この視点をも意識して模索展開したいと考えている。

長谷川三千子は和辻哲郎の「日本語と哲学の問題」にふれて、和辻は「ことの意義」の問題に真正面から向き合っていたとして、「こと」の意義を三つの方面に分けて考えていたことに注目している。まず第一は「動くこと」「美しきこと」のように動作や状態を示す意味、第二は出来事や事件を表す意味である。そのように説明したあとで、『「こと」はさらに「言」を意味する』と言うが、それはただ単に第三番目の意味を見つけ出そうとするのではなく、むしろ和辻は「言」としての「こと」の意味が、いかにして第一、第二の意味とつながっているのかを見極めようとしていることに注目し、その洞察は「言」と「事」とのむすびつきの核心をずばりと言いついてある。それは和辻の「言」の特性を「あらわにする」ということの内に認めて、そしてそれはまさしく「事」の特性としてあったものだということを指摘しているとして、つぎの和辻の「こと」問題の解釈を引用している。

それでは「言（こと）」の特性はどこにあるか。それは「言（こと）」が人々のあいだに話され、聞かれ、理解されるというこ

ろにある。人はその「したこと」を人に話すことはできる。しかし話すのは「したこと」自身ではなくして「言（こと）」においてあらわにされた「したこと」である。かくのごとく「こと」が「言（こと）」においてあらわにされ、したがって人々の間にわかちあわされるというところに「言（こと）」の特性が認められねばならぬ。このことはすでに「こと」の語義に、「ことごとしく」というごとくあらわに目立つという意味、あるいは「こと」（殊、異）というごとく他とことなつて目立つという意味が存在することとも何らかの関連をもつであろう。しかしながら「言（こと）」のこの特性は、それが本来「こと」の性格として存するのではないならば、「言」と「事」とが本質的には同一であるとの前言を覆すことになる。「こと」が本来「あらわにする」という性格を持ち、それが「言（こと）」として現れるのであるとき、初めて「言（こと）」が本来の「こと」でありつつしかもそれ自身の特性を持つゆえんが理解されるのである。

つづいて「こと」のもつ第二の語義は「出来事」として語られているのであるが、和辻は「日常生活において何らか目立つ事件はすべて出来事である」と言う。ここにおける「こと」の意味は、文字通り「出て来る」ことにあると次のように述べる。

「出て来る」は生ずる、起こるの意味であって、しかも最もあらわに生起の本質をあらわした言葉である。あたかも肌に腫物ができるように、「こと」もまたどこよりか出て来る。そうしてどこかへ過ぎ去っていく。しからば出来事としての「こと」は時間を本質とするというべきであろう。この意味においては「出て来る」のは何人の<sup>なんびと</sup>作爲をも待たず、何人も左右し得ないこととして、自ら生起し経過することである。

長谷川は、そうとすれば、「こと」のもつ「あらわにする」働きの原動は、まさしくこの出来事としての「こと」の「自ら生起」する力にあるのだということになるだろうと言い、この字の甲骨文字の字形が楷書になった「事」の意味は、旗を手でもって定位置に立てている図がその意味をあらわしているということ、『漢字語源辞典』（藤堂明保）からひっぱりだして、これは公のつとめに従事するさまを描いたものであり、ここから「つとめ」「つかえる」という意味が出てきたと解説されていると述べる。実際にも「事業」「事行」「事官」「事君」「事功」「事大」「師事」等々の漢語が数かぎりなく多く、「仕事」をのぞいては、ほとんどが音読みの「漢語」としての使い方であって、日本語としては「事」と書いてそれを「つとめ」と読むことはない指摘し、それはなぜかというところまで「こと」の日本語的意味の普遍化を演繹している。そして氏は、もしも上代の人々が、その屹立する形に注目して「事」の字をえらんだのだとすれば、それはまさに、さきほどわれわれが見出した「こと」という語の〈意味のベクトル〉そのものを、この字形のうちに見た結果だ、ということになると結ぶ。そして「こと」が和辻のいうように「出て来る」という意味をもっており、「生起する」ということをその本質としているなら、そのような「こと」の理解が、日本人の世界観に深い影響を及ぼしていないはずはあるまいと言ひ、それを探るためには、わが国の創世記とも言うべき『古事記』に目を向けるべきだろうと主張しているのであった。